

不登校児童生徒への対応事例11 (中学校第 2 学年男子)

～ 担任・適応指導教室指導員・S C 等の連携による組織的な対応～

問題の把握

当該生徒は、負けず嫌いで、うまくいかないとふてくされる態度をとる傾向があった。7月、学級において、周囲の生徒から自分に対して何か言われているような気がして不安になり、学校を休みがちになった。夏休みが明けると不登校の状態が続くようになり、担任等による登校の働きかけも効果のない状況であったことから、9月から適応指導教室に通級するようになった。

当該生徒の不登校の状況の解消を図るためには、人間関係についての不安の解消、当該生徒のコミュニケーション能力の向上、登校への意図的な動機付けが必要であると考え、関係機関等が連携を図り、次のような対応を行った。

当該生徒の欠席の状況

6月	0
7月	1
8月	6
9月	18
10月	19
11月	19
12月	14
1月	11
2月	18
3月	13
4月	0
5月	0

対応状況

人間関係についての不安の解消

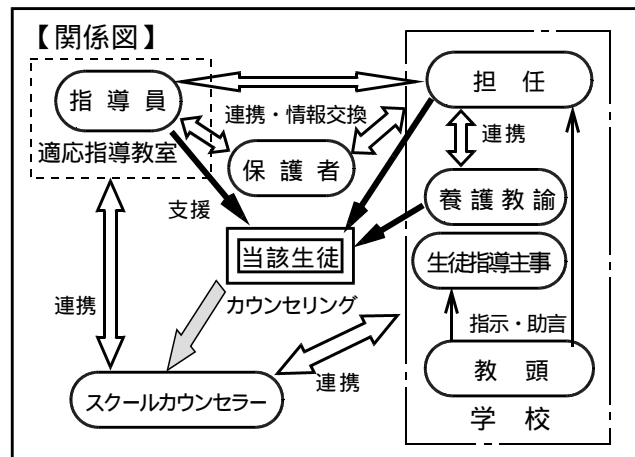
- ・養護教諭からの情報などにより、当該生徒は学級や部活動における孤立感をもっていたことから、人間関係についての不安の解消を図るため、担任がきめ細かく家庭や適応指導教室に足を運び、学校の様子を伝えるとともに、級友や部活動の生徒からの手紙などを渡した。
- ・スクールカウンセラーが適応指導教室に来室した際、当該生徒と一緒に活動する中で、学校生活への不安などについて話を聞き、不安解消へのきっかけとなった。
- ・また、少しずつ登校できるようになった4月には、進級の際に学級編成を配慮することにより、人間関係についての不安を解消することができた。

当該生徒のコミュニケーション能力の向上

- ・学校生活において、すぐにふてくされてしまうなどの当該生徒の態度が、周囲の生徒との人間関係に影響を与えていたことから、適応指導教室では、当該生徒のコミュニケーション能力の向上を図る活動を多く取り入れた。
- ・放課後に勝敗のある運動やトランプゲームを行い、勝ち負けへの執着を和らげる声かけをしたり、バス見学旅行などの体験活動を通して、友人と打ち解けるようにしたりするなどの取組により、次第に当該生徒がふてくされる場面は見られなくなった。

登校への意図的な動機付け

- ・当該生徒は、「修学旅行には行きたい。」と強く考えていたことから、適応指導教室の指導員と担任、保護者が連携を図り、修学旅行に行くためには、クラス替えのある4月からは登校する必要があることを伝えた。
- ・修学旅行に向けた準備の話をしてから、当該生徒は登校への意欲をもつようになり、11月～12月には月1回程度の登校、1月～3月には週に1回以上登校するようになり、進級した4月からは毎日登校するようになった。



不登校の問題を速やかに解消するためのポイント

- ・担任や養護教諭、生徒指導主事が連携を図り、不登校の原因を早期に把握し、解消を促すこと。
- ・適応指導教室の指導員やスクールカウンセラーが連携し、役割を明確にしながら当該生徒への働きかけを行うこと。
- ・当該生徒の思いを生かし、登校への動機付けを行うとともに、生徒自身に登校までの見通しをもたせること。